

4. 文芸と道徳

一

イギリスのエリスは専門の文芸批評家ではなく、実は科学者、性の心理学の建設者であるが、文芸を批評する書も書いている。上で述べたように、彼はまるで専門の“批評家”のような先入主と気焰を持っておらず、細かいところから毛を吹いて傷を求めるようなことを専らにせず、——専ら大処に着眼して、広大な心と緻密な脳によって一切を較量して、その結果公平なことが言えるようになり、“批評家”連中が言うところとははるかに違う。これは彼が科学と芸術を同時に理解できるばかりでなく、実は精神が広いことによるのである。彼の書いた『新精神』、『断言』、『感想録』から『男女論』、『罪人論』、『性の心理研究』と『夢の世界』に至るまで、随処で明智公正な言葉に出会い、人を心から喜び感服させる。以前『感想録』から猥褻を論じた文章を抄訳して、「オアシス」で紹介したことがあるが、こんどは『断言』（Affirmations 1898）*によってまた彼の文芸と道徳に関する意見を抄録する。

『断言』には全部で六篇の文章があり、それぞれニーチェ、カサノヴァ（Casanova）、ゾラ、ユイスマン（Huysmans）、聖フランシスを論じたもので、いずれも皆十分面白い題目であり、一貫して流れているのは彼の健全で清浄な思想である。いま引くのはカサノヴァとゾラの二章の中の言葉でしかない。カサノヴァは十八世紀ヨーロッパの有名な不道徳な人物である。というのは彼は多くの多くの婦人を愛し、しかもフランス語の日記を残し、そこにはっきりと書いている。公刊された一部分はすでに編者の“校訂”を経てやはり不道徳な文書の項目に入れられているけれども、シモンズ（Symons）が『数世紀の人物』で言うところによれば、この書に対して真つ当な批判を加えたのは、——少なくとも英米では——ただエリス一人である。カサノヴァは好色だけれども、決して女性を弄んだ人ではない。“彼は完全に最近の性の心理学者が言う「求愛の第二法則」を掌握している、つまり男が己一人の満足を図るのではなく、女性の心身の状態に対してもねんごろな注意を払っていた。この事では、カサノヴァは現在の最も道徳的な世紀の多くの賢夫に与える教訓たるに足りないものはない。彼は愛する女性の悦楽を悦楽として彼女たちの奉仕に耽らない。彼女たちも彼の愛の技術の巧みさをねんごろに認知したようである。カサノヴァは多くの女性を愛したが、誰かの心を傷つけたことはなかった。……道徳繊維のもっと細い人はこんなに多くの女性を愛せないし、道徳繊維のもっと太い人もこんなに多くの女性を幸福にすることはできない。”これは確かな正当な批評といえよう。

だがカサノヴァ日記の価値はやはり芸術の面に重く、エリスによればこれは芸術としての良書で、しかもとても道徳的であるという。“ショーペンハウアー（Schopenhauer）に名言がある、我々は人生のどの道を行こうが、我々の本性にはどうも若干の分子があつて、ちょうど相反する道においてしか満足を得られない、したがってたといひかなる道を行こうとも、われわれはどうしてもいささか苛立ちそして不満足なのである、と。ショーペンハウアーから見れば、この思想は人を厭世的にするが、実は必ずしもそうではない。われわれは綿密に実生活と調和すればするほど、われわれの内面の使われない満足されない地面が当然ながらいよいよ増大する。だがまさ

にそこにこそ、芸術が入って来る。芸術の効果はたいていがこうしたわれわれ有機体の不用な繊維を擲擻い、それによってそれらのある諧調ある満足した状態に行かせる——つまりそれらを道徳化する、もしそのように言いたければ。精神病の医者はかつて、高潔に禁欲生活を過ごしたオールド・ミスたちに特有の、一種悲惨な精神障害を述べたことがある。彼女たちは当初は自分の境遇に満足しているように見えたが、何年か経つと、しだいに抑えがたい妄想と色情の衝動が現れる。そうした生活では使われない分子が、心霊の穴倉に閉じ込められ、ほとんど忘れ去られているが、ついに叛乱を起こし、要求を満足させるよう騒ぎ立てる。古代の狂宴——クリスマスの農神の祭り、聖ヨハン節の夏祭り——は、いずれも古代人の聡明な承認を証明している。日常道徳の実生活の拘束は時には解放されるべきなのである。それがきつすぎて破裂に至らないように。われわれにはその狂宴はなくなったが、その代わりにする芸術がある。われわれの真面目な女主人はもはや娘たちに松明を手に夜中の山林に行かせ、そこでダンスをし酒を飲み血を流して、彼女たちに人生の秘密の知識を与えようとはしない。いま彼女は娘たちを連れて「トリスタン」を見に行く、——幸いにして気をつけて育てられた若い魂たちがその時どのような状況であるのかは読み取ることができないが。芸術の道徳化の力は、決してそれがわれわれの経験の懦弱な模倣品を作れることにあるのではなく、そのわれわれの経験を超越する能力が、われわれの本性の中にかつて充足されたことのない活力を満足させかつ調和することができることにある。芸術は鑑賞する人に対してこうした効力を持っていることは、もともと奇とするに足りない。われわれが覚えているように創作する人にも芸術はまさしくよく似た影響を及ぼす。ある人は画家のワットー(Watteau)を評して、蕩子の精神、賢人の行為と言った。モハムドがあのように放逸に天国の黒い瞳の仙女を描いた時、彼はまだ若く、年取った女人の品行方正な夫であった。

歌は甘美だ、だが知らねばならない、

唇が歌うとき、接吻はできない。

かつてワグナー(Wagner)について、彼の心には一人の禁欲家と一人の好色家の本能がある、この二つの性質は彼を大芸術家にする上でともに同じように重要であったと言った人がいる。これは古い観察であるが、かの最も貞潔でない詩は最も貞潔な詩人によって書かれた、最も清浄に書いた人々は生活の上では最も清浄ではなかった。キリスト教徒の中でも全く同じで、新旧両派にかかわらず、多くの最も放縦な文学はすべて宣教師が作ったものであるが、決して宣教師が墮落した階級であるからではなく、実はただ彼らの生活の厳しさがこうした感情の操練を求めたからにすぎない。自然の観点から言えば、そうした文学は悪い、これは猥褻の一種の形式にすぎない、ちょうどユイスマンが言ったようにただ貞潔な人だけが書くことのできるものである。大自然の中では、欲求は急速に行為に変わり、心に何の痕跡もとどめない。あるいは一定程度の節制——わたしは単に性に関する事柄を指しているのではなくその他多くの人間生活の活動をも含んでいる、——は必要かもしれない、欲求の夢想とイメージは成長して芸術の完成した幻影となることができる。しかし社会的な観点は純粋な自然とは違う。社会的にはわれわれは衝動が急速に自由に行為に変化することを許容する余地を持つことができない。圧迫された衝動の危害を

避けるために、そうした感情をさらに高く穏やかな面に移すことこそ緊要となる。ちょうどわれわれが有機体の中の不用でやや粗い活力を伸長し和諧させるために体操を必要とするように、われわれはそのやや細かい活力を伸張し和諧させるための美文・文学を必要とする。ここで説明しなければならないのは、情緒はたいてい一種の筋肉の作用で、多少とも停滞した状態の中での動作であるから、上に述べたのは単に普通の類似ではない。この面から見ると、芸術はまさに情緒の操練である。カサノヴァの日記のような書は、こうした操練の重要部分である。これも濫用されるかもしれない、ちょうどわれわれの陸上競技の走者やサイクリストが過剰であるのと同様に。だが有害なのは濫用であって、利用ではない。文明の人為的な制度のもとで、それら英雄的に自然な人物の生活と行動を鑑賞するのは、精妙な精神作用を含んだ練習である。したがってこうした文学は道徳的価値をそなえており、それは現代文明の分化の日程の中で、われわれが平安に生活することを助けてくれる。”（原文 114～117）

エリスはそのあととても愉快に結論を出している。“もしこの書から少しの享樂も得られない文明化した男や女がいるとすれば、そこには必ず不健全でかつ異常、——芯まで腐ったところがあるに違いない。”

二

ゾラの著作は、道徳を語る宗教家と“芸術”を談ずる批評家から見れば、どちらにしても要らないものである。彼の自然主義は浅薄のみならず有害であるのだ。だがそうした議論はほっておけばよい。われわれはエリスの公正な批評を述べるだけだ。彼によればゾラの文学を成り立たせているものに三つの理由がある。第一に、彼の父系がギリシア・イタリアの血を引いていること。第二に、家庭の中の労働と学習の習慣。第三に、最も重要なのは少年時代の貧窮した禁欲生活である。“その臆病で慎ましい少年——ゾラは少年及び壮年時代はずっとそうした性質であったそうだから、——は、その全ての新鮮な活力と共に屋根裏部屋に閉じ込められ、パリの生活の全景がまさしく彼の面前に展開された。境遇及び気質に迫られて、極めて貞潔で醒めた生活を送りつつ、ただ一つ快樂の道を残していた。それは視覚の饗宴である。われわれは彼の書を読むと、彼が存分にそれを利用したことがわかる。『ルーゴン・マッカール叢書』のどの一冊を取っても全て物質的な影像の饗宴であるから。ゾラは乃ち貞潔であり、しかもやはり醒めている、しかしこの弱年の努力、外界の影像音声及び臭味を吸い取ろうとする努力は、ついに決まった方法を作り上げた。人生の一角を切り取り、その全てを詳細に記録し、また生きた人間を一人ほうり込んで、彼の周りのあらゆる影像や臭味と音声を描写する。彼自身は全く自覚していないのだけれども、これは最も簡単な、「実験小説」を作る処方である。この方法は、著者の世間的な経験に基づいている、とわたしは主張したい。人生はただ影像音声臭味としてのみ、屋根裏部屋の窓から入って、彼の面前にやってきた。”

“ゾラの同時代及び後代の芸術家に対する重要な貢献、彼が与えた刺激の理由は、そうした人生の粗末でしかも無視される細目には、すべて潜伏した芸術の効用があることを彼が証明したことにある。『ルーゴン・マッカール叢書』は、彼の虚弱な同僚から見れば、まるで天上からほり

出された四隅を縫い合わせた大風呂敷のようで、中には四つ足の獣や、爬虫類に鳥などがいっぱい詰め込まれていて、芸術家及び道徳家に訓示を、つまり世の中には平凡あるいは不浄と言えるようなものはないのだと訓示しているように見える。これ以後、他の小説家はこれによって以前は決して行こうとしなかった所に興味を感じることができるようになり、強健で大胆な言葉で人生を書くことができるようになった。もしゾラの先例がなければ、かれらは使う勇気がなかったろう。しかしながら別の面で、彼らはまだ著作に単純で精密で内面的な経験を自由に加えることができる。この三者はいずれもゾラにはない特色である。”要するにゾラは“小説の領域を拡大した”、つまりこの一事でも文芸史上に一時期を画するに十分である。

ゾラは好んで粗野な言葉で猥褻な事を書いたのが、世を挙げての恥非難の原因であるが、これもまさしく彼の一大長所である。エリスは云う、“用語の範囲を拡大したのは誰も感謝しなかったが、長い年月が経つと、これら大胆に強烈で単純な言葉を採用した人々のおかげで、文学も進歩するのである。イギリスの文学は近二百年來、表現を軽視するという社会の傾向のために、あらゆる有力で深いことばが改変されたり禁止されたりで、阻害を受けてきた。もしわれわれが振り返ってチョウサーを、あるいはシェイクスピアでもよい、を調べたなら、われわれがどのような表現力を失ったかがわかるだろう。……たとえばわれわれはほとんどすでに二つの重要な言葉「腹」〔belly〕と「腸」〔bowels〕を失った。「詩篇」の中ではもともとたくさんかつ巧妙に使われていた。「胃」〔stomach〕というが、このことばは意味が合わないばかりか、真面目なあるいは詩的な使い方では極めて不適切である。古代文学あるいは民間の俗語を知っている人なら、だれでも同じような単純で力強い語句、文章からはすでに消失し、代替すべく欠けらも残されなかったことばを思い浮かべられよう。現代の文章では、人間は頭と尻尾の両端が残されるだけだ。われわれは尾骶骨を中心として、一尺八寸の半径で——アメリカではもう少し長い——円を描き、あの「雑役をする」胃の他は、人々が円内の器官を言うのを禁止する。言い換えれば、つまりわれわれは人々が人生の二つの中心の機関（食と色）についてものを言えないようにしているのだ。

“このような状況のもとで、本当の文学がどこまで成長できるかは、疑問である。なぜなら文学がこれによって締め出され、人生の要点と接触できないばかりか、そのように締め出されたいと願ひ、社会の限定する用語の範囲内で自在でいられると思う文人でも、要するに大著作家を形作る英勇的な資質が作り出すところのものではない。社会的な用語の限定はもともと有用である。われわれは全て社会の一員であるから、われわれは当然、放恣俗悪の侵入を避ける保障を持つべきである。だが文学上はわれわれは自分の読みたい本を読み、あるいは何を読まないかを自由に決定することができる。（だから言語の放恣は決して妨害とならない。）もし誰かが客間の話題と言葉だけを携えて、おずおずと文芸の世界に入ってくれば、彼は遠くまで行けない。わたしはかつてある荘重な文学雑誌が軽蔑して、ある女性が書いた小説が男がクラブでも話さない問題に論及していると述べているのを見た。わたしはその本を読んだことはないが、それによってその小説がまだ希望がありそうだった。文学は当然クラブの基準以下に墮落することができる。しかしもしクラブの基準以上に上昇できないならば、クラブに坐って、そこでお話

をしているか、あるいは外の十字路に掃除にでも行った方がよい。

“……どんな時期であっても、偉大な文学は英勇的なものを伴わないものはない。ある時代には、文学上にこうした英勇的なものを実現させることは、他の時代に比べてずっと好都合ではあるけれども。現代のイギリスでは、勇敢はすでに芸術の道を外れて、商業の面に転入し、愚昧なものが世界の果てまでその実行を求めて行っている。われわれの文学は英勇的でなく、ただ客間の濁った空気の中に閉じこもっているので、イギリスの詩人と小説家はもう世界の勢力とはなれず、本国の居間や子供部屋の他は誰も知るものがない。フランスは絶えず誰かが出て、あえて英勇的に人生と真向かい、人生を芸術の中に溶接するので、フランスの文学は世界の勢力となり、どんな所でも明智の人がありさえすればその成績を認められる。もし精美であるばかりか偉大でもある文学がイギリスに現れるなら、その時われわれはそれが英勇的であることによってそれを知るであろう。もし別の記号のよるのでなければ。”（原文 148～152）

※初出：1923年6月1日『晨报・文學旬刊』第1號

* “Affirmations” Walter Scott, London. 1898.